



Title	ブラジル言語学の父、Mattoso Câmara Jr.
Author(s)	河野, 彰
Citation	ブラジル研究. 2006, 1, p. 55-61
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98379">https://hdl.handle.net/11094/98379</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ブラジル言語学の父、Mattoso Câmara Jr.

河野 彰

## 1.

ここ十数年、ブラジルの大学では、言語学の研究と教育がきわめて活発に行われており、とりわけリオ（リオデジャネイロ連邦大学、リオデジャネイロ・カトリック大学）、サンパウロ（カンピーナス州立大学、サンパウロ州立大学、サンパウロ・カトリック大学）、ブラジリア（ブラジリア大学）などでは優れた言語学者たちが活発な研究プロジェクトをそれぞれの大学で展開している。また彼らの指導により多くの修士論文、博士論文が言語学の分野で書かれている。また言語学と言っても、ひとつの分野に偏ることなく、生成文法理論はもとより、社会言語学、心理言語学、言語教育など多彩な分野に及ぶ。ブラジルの言語学をめぐるこのような状況を生み出した影には偉大な言語学者の存在があったことを忘れることができない。その人の名は Joaquim Mattoso Câmara Jr.(1904 – 1970) である。まさにブラジル言語学の父と言える存在であった。奇しくも、2004 年は、Mattoso Câmara の生誕 100 年にあたったので、サンパウロ・カトリック大学で編纂されているブラジルの代表的な言語学雑誌 DELTA(Documentação de Estudos

em Lingüística Teórica e Aplicada)はその第 20 巻特別号 2004 年(発行 2005 年)をこの偉大なブラジルの言語学者に捧げた。彼の研究は主としてヨーロッパ流の構造言語学の枠組みで行われた関係もあり、生成文法などが主流の現代ブラジル言語学界に直接の後継者はいない。しかし、もし Mattoso Câmara の存在がなかったならば、果たしてブラジルの言語学界は今日のような発展を遂げたであろうか。以下、彼の生涯と業績を振り返ってみたい。

## 2.

Mattoso Câmara の死去 2 年後にあたる 1970 年に Fundação Getúlio Vargas は彼の助手であった Carlos Eduardo Falcão Uchôa の編集により *Dispersos* と題した Mattoso の論文集を刊行した。Uchôa の序文により Mattoso の生涯を見てみよう。

Joaquim Mattoso Câmara Jr. は Joaquim Mattoso Duque Estrada Câmara を父、Maria Paula de Castro Silva Mattoso Câmara を母として 1904 年 4 月 13 日、リオで生まれ、1970 年 2 月 4 日にやはりリオで死去した。彼が大学に進学する年齢に達した 1920 年代のブラジルにはいまだ総合大学(universidade)は存在せず、単に職業教育に徹した単科大学(faculdade)が存在するのみであった。1927 年、Mattoso は「国立美術学校」(Escola Nacional de Belas-Artes)の建築学科を卒業し、1932 年、当時の「リオデジャネイロ大学」(Universidade do Rio de Janeiro)の法学部を卒業した。このように彼の学歴は、当時の社会情勢にもよるのだが、言語学とはおよそ縁遠いものであった。しかしながら言語研究への思いやみがたく、1937 年には、当時の「連邦直轄区大学」(Universidade do Distrito Federal)の「ラテン語およびネオ・ラテン語文献学コース」(curso de filologia latina e neolatina)に通い、ソルボンヌ大学からの客員教授

George Millardet の指導を受けた。1943 年にはロックフェラー財団の奨学金を得て、米国の大学へ留学し、Louis Gray や Roman Jakobson などの授業に出席した。ブラジルへ帰国後、Mattoso は当時の「ブラジル大学哲学学部」(Faculdade Nacional de Filosofia da Universidade do Brasil)―哲学学部(Faculdade de Filosofia)とはブラジルの大学の人文科学系の伝統的名称―博士課程に通い、1949 年、*Para o estudo da fonêmica portuguesa* (ポルトガル語音素論のために) と題した博士論文で文学博士号を取得した。

教員としての経歴は、1928 年に中等教育の教員として採用され、いくつかの学校でポルトガル語やラテン語の教師を務めた。大学教師としては、1938 年に「ブラジル大学哲学学部」(Faculdade Nacional de Filosofia da Universidade do Brasil)の言語学担当教授として招聘された。これがブラジルの大学における体系的で一貫した言語学教育の最初のものであった。そして 1962 年に「連邦教育評議会」(Conselho Federal de Educação)がブラジル全土の大学文学部に言語学をそのカリキュラムに導入するよう決定するまで、この Mattoso による言語学講座はブラジルで唯一のものであった。

1952 年に、Mattoso は上記「ブラジル大学哲学学部」において、*Contribuição para uma estilística da língua portuguesa* (「ポルトガル語文体論への貢献」) と題した正教授昇進論文を提出し、正教授となつた。また同時にリオのいくつかの私立大学でも言語学を講じた。

後に、Mattoso は、すでに言語学部門のコーディネータを務め、またブラジル先住民言語のコースを担当していたリオの国立人類学博物館の一部局であった言語学部門の修士課程に参加して、後進の指導にあたつた。また国内の多くの大学から招かれて、多くの講演や授業を行い、また米国のジョージタウン大学、ポルトガルのリスボン大学などでも客員教授を務めた。死の直前まで

ALFAL(Associação de Lingüística e Filologia da América Latina — ラテンアメリカ言語学会)の会長を務めていた。まさに Mattoso は、伝統文法と文献学(Philology)が支配的であった当時のブラジルに「一般言語学」を導入したパイオニア的存在であったと言えよう。しかしその偉大な人物も、上述の DELTA 特集号に序文を寄せたブラジリア大学の Aryon Dall'Igna Rodrigues によれば、「言語学者としての Mattoso は self made man であった」。

伝統文法と文献学が支配的なブラジルにあっては Mattoso の提唱する言語学(より正確にはヨーロッパ流の構造言語学)はなかなか学界で受け入れられなかつた。彼の死んだ 1970 年以降、ブラジルでも言語学の研究は大いに発展することになるのだが、皮肉なことに、時代はすでに構造言語学から生成文法への転換期を迎えていたのであつた。結局、Mattoso はある意味で後継者を残すことができなかつたが、他方また、新たな転換を迎えた言語学をブラジルが受け入れ、大いに発展させる基礎を築いたことは確かだ。

### 3.

Mattoso Câmara の研究業績については、前述の *Dispersos* 所収の Carlos Eduardo Falcão Uchôa による書誌が詳細であるが、また Mattoso の著作のうちブラジル国外で最も知られた *The Portuguese Language* (trans. by Anthony J. Naro, The University of Chicago Press, 1972) 所収の Anthony J. Naro と John Reighard 編纂の *Analytical Bibliography of Joaquim Mattoso Câmara Jr. – With Index by Date of Publication and Index of Reviewers* もきわめて有益である。

Uchôa によれば、Mattoso の研究業績はおよそ以下のように分類される。(1) 一般言語学、(2) ポルトガル語研究、(3) 文体論

#### 研究、(4) 言語学研究史、(5) ブラジル先住民言語の研究

Naro & Reighard は次のように分類する。(1) ポルトガル語の文法的研究 (ポルトガル語音素論、条件法〔過去未来〕の動詞形の問題、対格としての *ele*、ポルトガル語形態論における種々の問題)、(2) ポルトガル語文体論研究 (文体論一般、ブラジルの作家 Machado de Assis の作品についての文体論研究)、(3) ブラジル先住民言語の研究、(4) 参考書および文献表 (言語学の理論的入門書や用語辞典)、(5) 専門誌や新聞・雑誌等に発表した多くの言語学、ポルトガル語に関する論文、エッセー、書評など

Mattoso の発表した多くの論文は様々な専門誌や論文集に掲載されていて、まとめて読むのは困難であるが、上記 *Dispersos* には彼の主要な論文のいくつかが収められていて、便利である。そのうち “Erros de escolares como sintomas de tendências lingüísticas no português do Rio de Janeiro” (リオのポルトガル語の言語的傾向を示す資料として児童・生徒の作文に見られる誤りを分析したもの)、“Ele como acusativo no português do Brasil” (ブラジルのポルトガル語に見られる目的格人称代名詞としての *ele* の用法を分析したもの)、“Considerações sobre o gênero em português” (ポルトガル語における性(gender)についての分析)などは興味深い論文である。

Mattoso の主要な著書はその多くがポルトガル語で書かれ、ブラジルで出版されたため、その影響力は限定的にならざるを得なかつた。しかし 60 年代に Eric Hamp を General Editor としてシカゴ大学出版局が企画した *The History and Structure of Languages* の一角に、Roy Andrew Miller による *The Japanese Language* (1967)、同じ著者による *Japanese and The Other Altaic Languages* (1971) などと並んで Mattoso による *The Portuguese Language* (1972) が刊行されたことは、きわめて意義のあることだった。当時はシカゴ大学

に所属していたが、後にブラジルへ移り、主としてリオデジャネイロ連邦大学やリオデジャネイロ・カトリック大学で教鞭をとり、ブラジル言語学の発展に尽くすことになる Anthony J. Naro が訳者となり、ポルトガル語から英語へと翻訳された。「訳者まえがき」によれば、本書の草稿はシカゴ大学出版局の依頼により、1963年から1965年にかけて執筆され、その後、何度も加筆・修正が施され、同出版局は修正版を受け取ったのが1967年（奇しくも本稿の筆者がポルトガル語の学習を開始した年）、訳稿は Mattoso の手元に送られ、著者としての最終的修正を施した。第9章まではすでに出版社に返送されていたが、最終章のみが死去の際に Mattoso の手元に残されていた。当時、訳者の Naro はアンゴラで研究に従事していたので、原稿はブラジル、アメリカ、アフリカの間を往来した。このような事情から本書が、Mattoso の死後、1972年に出版されたことは運命のいたずらとも言うほかはないであろう。

*The Portuguese Language* は次の10章から成っている。1.The Portuguese Language, 2.Phonology, 3.The Morphology of Nouns, 4.The Morphology of Pronouns, 5.The Adverb, 6.The Verb, 7.Periphrastic Structures, 8.Connectives, 9.The Lexicon, 10.The Sentence 本書は通時態と共時態のバランスがよく、ラテン語からポルトガル語への変化から説き起こし、共時態の分析に進むものであるが、構造言語学の枠組みによっているので、音韻論や形態論は詳細に論じられているが、統語論に弱点がある。1972年、米国や日本では生成文法理論が盛んに研究され、多くの論文が発表されていた時期であり、構造言語学はもはや時代遅れとなっていた。80年代にはいり、多くのブラジル人が米国の大学に留学し、博士号を取得した。そのうちの多くの者がブラジルの大学にポストを得て、言語学の研究と教育を推進したので、80年代後半からブラジルの言語学

界は大いに発展することになるが、方法論的には言語学の転換期に刊行され、タイミングが悪かったとはいえ、Mattoso の一連の著作と研究者・教育者としての活動がなかったならば、ブラジルの言語学は果たしてここまで発達したであろうか。少なくとも、もし Mattoso Câmara なかりせば、ブラジル言語学界は大いになる回り道を余儀なくされたであろう。生成文法や社会言語学などの分野で活躍中の現代ブラジルの言語学者たちの多くは Mattoso の「肩の上に乗っている」と言っても過言ではないだろう。